

台湾異文化体験交流ツアー（2024 年度夏期）

海外への壁

人間社会学部 高木俐緒

1. 全体を通して学んだこと

私が今回の四日間の台湾への渡航を通して学んだことは、海外とは意外と身近な場所であるということです。私は今まで海外へは疎か、飛行機すらも乗ったことがありませんでした。そのため言語や食文化等の理由から勝手に「海外」という大雑把な分類に対して壁を感じ、第二言語への苦手意識も相まって、自身とは一生縁遠いものだと思い込んでいました。それにもかかわらず今回のツアーへの参加を決めたのは、言葉が一切分からなくても大丈夫だと言われたことと、行き先が台湾であったことが決め手でした。私には台湾生まれ日本育ちの友人がおり、台湾という地にだけはもともと少し興味がありました。

正直なところ、半分旅行のような気分で参加させていただきましたが、話を聞いたり、インターネットで見たりした通りであって、全くそうでないような不思議な体験をした四日間でした。食べ物も建物も見聞きしたとおり、そっくりそのものであるのに、やはり実際に目の前にすると新たな発見があり、また違った見え方ができるようになった気がしています。その中の一つとして一番強く感じたことは、海外とはただ日本と海を隔てているだけの地であるということでした。もちろん、衣食住の文化、その地の歴史、言葉など日本と異なる部分を多く体感してきましたが、だからこそより一層強くそう思いました。言葉が違う、歴史が違うなんてことは、考えてみれば日本国内でもよくある話です。海を隔てていなくとも、ほんの数 km 離れただけで通じなくなってしまう言葉があったり、捉え方の違いによって自分の意図が上手く伝わらないことがあったりするものなのです。実際、世界的にグローバル化してきた影響もあるかもしれませんが、話せない・聞き取れない・読めないといった状況でも電車に乗ったり、ショッピングをしたり、食事を取ったりなどをほとんど不自由なくすることができました。そういった経験を通して、やはり「体験してみる」ということは他の何にも代え難い、人生を豊かにしてくれるものであり、少しでも興味があるものには思い切って飛び込んでみることも大切であると学びました。

2. プログラム参加を通じた気付き

私は異文化体験交流ツアーのプログラムに参加したことで、実際に体験する・体感することは何事にも代え難い経験となり、自身の考え方の根本を変える影響力を持っているものであるということに気付きました。

今回の四日間を通して、今まで学校の教室で勉強してきたような、紙の上の物語や単語たちが実際にその地の文化として、伝統として、現在に受け継がれているところを見聞きしてきました。以前まではどこか現実感がなく、ふわっと捉えていたものたちが形となって目の前に現れる様というのは、新たな世界に触れられたという高揚と想像が具現化した感動を覚えるものでした。

3. 今後の展望

私は今回のプログラムに参加したことで行動をしてみるという勇気とそれが出来たという

自信を得ました。反対に、反省点としては全くと言っていいほど言葉が分からなかったことです。東呉大学*の方に完全に助けられてのコミュニケーションになってしまったことをありがたいと思う一方で、申し訳なくも思っていました。その申し訳なさを解消すべく、私は中国語の勉強を始めようと思いました。東呉大学の友人たちとはSNSで繋がっていますし、今後日本に行きたいとも言っていました。彼らが日本語を話すようにスラスラ中国語を話せるようになるのは難しいとは思いますが、今から少しずつでも学んで、いつか彼らが日本に来る際には日本語だけでなく中国語でもお話しできたらと思っています。

*当異文化体験交流ツアーでは、本学の協定校である「東呉大学」での学生交流が含まれる。交流する協定校はその年により異なる。

4. さいごに

私は短くも長い四日間で非常に多くのことを学ぶことができました。ただ、その全てを言葉にするのは難しく、表現力が私の感じたことに追いついてないこともしばしばでしたが、こうして改めて文章にして整理してみることで得た気づきもありました。学んだこと、得たもの、感じたこと、そして新しい友人たちとの繋がりを大切にしていきたいと思っています。そして何より、知らない地に行く楽しさを知ってしまったので、このようなプログラムがまたありましたら、是非参加したいなと思いました。

